

大学の国際化とは何か

画一的な国際化ではなく、
多様性と個性、オリジナリティーが大事

Willy F. Vande Walle ・ルーヴェン大学 教授

●聞き手 上島 紳一

●関西大学副学長(研究推進・国際活動推進担当)
総合情報学部教授

2009年に関西大学名誉博士号を贈呈された
Willy F. Vande Walle ルーヴェン大学教授は、
ヨーロッパにおける日本研究の第一人者。
本誌の国際化特集にちなみ、国際的に通用する研究と
大学のあり方を語ってもらった。
聞き手は、本学の研究推進・国際活動推進担当の副学長、
上島紳一教授(国際部長)。

◆東洋の文化、仏教に注目

上島 関西大学では2006年に、ベルギーのルーヴェン大学(2011年までルーヴェン・カトリック大学)の歴史ある図書館の中に、関西大学日本・EU研究センターを設置しました。毎年、国際シンポジウムを開催し、隔年に「Japan Week」のイベントを併催しています。Vande Walle先生には、研究面はもとより、同センターの運営面でもご協力、ご指導をいただいております。

2006年春の外国人叙勲において旭日中綬章を授与されたVande Walle先生は、ヨーロッパを代表する日本学研究者であり、その研究対象は広範囲に及んでいます。まず、先生が日本研究の道に進まれたきっかけからお聞かせください。

Vande Walle 私は1960年代に青春時代を送りました。当時の社会には、自分が生まれ育った文化とは異なる方向を求める風潮があり、既存の社会体制を疑問に思う若者も多かったのです。私も高校時代から東洋の文化に対する関心が高まり、それがどれだけ異なった人生観、世界観、人間観、社会観を教示してくれるものであるかを探りたいという思いが、日本に向かうきっかけになりました。

日本はアジアのいろんな思想がたどり着いている国であり、仏教などのインド文化や中国の文化も含めて、面白い文化の形態を示してくれるように思いました。当時、ヨーロッパでは禅に対する関心も高く、日本の古典的な映画もかなり人気を集めていました。私は従来の西洋文化に満足できず、東洋の方に目を向けたわけです。

上島 留学先の京都大学では、仏教史を専攻されたのですか。

Vande Walle はい。仏教について学ぶうちに、思想よりも仏教の儀式や儀礼を把握する必要があると思うようになりました。実際の文化の営みを理解するには、日々の実践や作法が重要であることを自覚したのです。

◆萬福寺や高野山で仏道修行を体験

上島 仏教の実践的な修行もなさったのですか。

Vande Walle 萬福寺(京都府宇治市)で8日間の大接心に参加し、座禅を組みました。また、密教にも興味をもったのですが、いくら本を読んでもピンとこないのが、高野山に行ったら3週間ほど修行させてもらいました。そのときは何の紹介もなしに、いきなり寺の門をくぐり入って行きました。

上島 全くの飛び込みで?

Vande Walle そうです(笑)。常喜院というお寺の門が見えたので、玄関まで行き、「ごめんください」と。住職の奥さんが



上島 紳一 関西大学副学長(研究推進・国際活動推進担当)
総合情報学部教授

出てこられたので、密教を勉強したい旨を伝えると、「主人に話をし、また連絡します」と約束してくださいました。1週間後に連絡をいただき、僧侶を育成するための専修学院に入れてもらいました。

一応、得度をして、修行に臨んだのですが、ちょっとがっかりしました。なかには、お寺で生まれ育った人たちが僧職を相続するために来ていて、仏教に関する問題意識や求道精神に乏しいと感じたからです。また、私は学者として仏教に関心をもっているが、仏教徒ではないということも自覚しました。その後、私の教え子の一人が高野山大学で修士課程を修了し、本格的に得度し、修行して阿闍梨になっています。

◆ホンダの通訳者として学術とは別の世界を経験

上島 Vande Walle先生は一時、ヨーロッパ・ホンダ専属の日本語通訳をなさっています。どのようなお仕事だったのですか。

Vande Walle 博士号取得後に帰国した私は、約10カ月間の兵役サービスを終え、就職を考えていたとき、ホンダがベルギーに大きな現地法人を設立し、通訳者を探していることを聞きました。面接を受けて採用された私は、1978年10月から3年間、ホンダに勤めました。同時に、大学で非常勤講師として日本語講座1科目を受け持つことになったのです。

それまでの学術の世界と別の世界を経験したことは、とても有意義だったと思っています。私は初めて、実業界とそこで働く人たちに接触する機会を得ました。それは面白い体験でした。ベルギー政府の使節団が日本に来るときは、付き添いとして来日し、ベルギー中央銀行の総裁が日本銀行の総裁と会うときには通訳をさせてもらいました。

上島 当時のホンダに、どのような企業風土をお感じになりましたか。

Vande Walle そのころは第一世代の人たちが要職に就いておられて、創業時代の雰囲気はまだ残っていました。彼ら自身、本田宗一郎という人は異色の実業家であり、ホンダは従来の日本企業とは違うと主張していました。私は本田宗一郎さんに何

■インタビュー



度かお会いしましたが、頭の回転が速い、実に面白い人で、時には無礼講の振る舞いもされました。

実際に、ホンダの第一世代の人たちは冒険的でした。50年代から60年代初めにかけて、たとえ英語ができなくてもヨーロッパ各地に出向いてビジネスを開始したり、F1(フォーミュラ・ワン)に挑戦して勝利したり。パイオニア精神にあふれていましたね。

◆岩倉使節団の記録から小国主義について考察

Vande Walle その後、大学の正規の教官になりましたので、ホンダの仕事は辞めざるを得なくなりました。ホンダに勤めていた間に、松尾芭蕉の紀行文を研究し、翻訳しました。そのころは日本の古典的な俳句、俳諧を研究テーマにしていたのですが、まもなく歴史的な研究に重点を移していきました。

上島 明治初期の岩倉使節団に関する論考や、日本とベルギーとの国際関係史など、非常に優れた研究だと聞いております。

Vande Walle 岩倉使節団の動向は面白くて、岩倉具視に随行した久米邦武の『米欧回覧実記』は、明治初期に日本がどういうふうに分を見ているかを知るうえで重要な史料です。明治初期の日本とその後の日本を比較すると、もの見方がかなり違ってきます。欧米各国の特徴を記し、ベルギーについても紙数を割いています。久米邦武が目にするのは、ベルギーは小国ではあるけれども周りの大国に対して十分対応できるような国づくりに成功したという点です。私は、国も時代も自分と異なる人のベルギーに対する見方を面白いと感じ、それが動機になって小国主義についての論文を書きました。

上島 ルーヴェン大学の日本研究のメンバーは、どんな分野の研究をされているのですか。

Vande Walle 日本学科の同僚のDimitri Vanoverbeke(ディミトリ・ファン・ヴェルベッケ)は、明治時代から第二次大戦までの日本の法制度を中心に研究しています。ほかに若手の研究者の一人は、戦前の日本の金融制度について、満州や朝鮮、台湾なども視野に入れた研究をしています。また、漫画の研究や日本語の歴史を研究している人もいます。

◆大学の国際化をどのように進めるか

上島 関西大学では現在、世界の62大学と学術交流協定を結び、国際交流に力を入れています。この4月には関西大学留学生別科を開設し、留学生寮も併設して留学生と日本人学生との交流を進めているところです(11～12ページ参照)。

また、外国語学部の全員が1年間海外で学ぶ「Study Abroad」をはじめ、各学部で国際的な広がりを持つ教育を展開しています。グローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点」に続いて、文部科学省大学改革支援事業として採択さ

れた国際化プログラムも進行しています。例を挙げると、文学研究科の大学院GP「関西大学EU—日本学教育研究プログラム」、教育GPとして商学部の「英語に強いプロアクティブリーダーの育成」、全学対象の「ICTを活用した教育の国際化プログラム」など。

大学の国際化とは何か、それをどう推進するかは大きな問題です。ヨーロッパでは、エラスムス計画(ERASMUS:European Region Action Scheme for the Mobility of University Students)が進められていますが、どのような状況ですか。

Vande Walle エラスムスは、EUが構想を企画したものです。加盟国の人々が互いにそれぞれの言葉、文化、社会などをよく知らなければEUの市民になりえない、という発想が根底にあると思います。最初はEUから資金が提供されましたが、定着するにつれて各大学が自前の資金で対応する方向に向かっているようです。

私どもの大学でもエラスムスに積極的に取り組み、いろんな国と学生交換を実施しています。大陸諸国間の交流は進んでおり、学生はかなりの割合で1学期あるいは1学年、外国で学んでいます。ただし、イギリスは例外で、国の教育予算が少ない分、自分たちで授業料を払わなければならないため、行きたくても行けないのです。

上島 全世界の留学生数は大幅に増加していますが、日本では逆に海外に出る学生の数が減っています。特に米国の大学への留学生数は、最盛期から半減している状況です。近年、日本人学生の「内向き志向」が問題になっています。

Vande Walle それは不思議ですね。なぜなら、今の日本の街を歩いていると、外国をほうふつさせるような光景ばかりが目につきます。例えば、イタリア料理店やアメリカのファーストフード店など。大阪ステーションシティも外国的な感じでしょう。外国志向が強くて、日本的なものは目にすることができなくなっている。外国にあやかったものではなく、もっと日本的なものに触れたいのに、悲しいかな、それがだんだん減ってきています。

◆社会全体に融通が利かなくなっている

上島 外国の文化を取り込んでいますが、学生自らが海外へ出ていこうとしないのが問題です。かつてのホンダのような冒険的、パイオニア的精神が見られなくなっています。今、国際化を進めるにあたって、国は語学力とネゴシエーション力を強化する政策を打ち出しています。先生はどうお考えですか。

Vande Walle もちろん、ある程度まで語学力を身につけておかねばなりません。しかし、国際化というものは、自分の文化を顧みず、もっぱら外を見て外のものを取り入れるのみに帰結するという考えではだめです。それが肝心なところです。

なお、これは日本の社会問題だと思いますが、融通が利かなくなっているのではないのでしょうか。個人の問題ではなくて、おそらく組織そのものの問題です。ヨーロッパにもその傾向がありますが、もうちょっと融通を利かせるようにしないと、日本が非常に損すると思います。

外国へ出ていかなければ、自国の文化もよく理解できません。何かを理解しようとすれば、それと違うもの、異質なものも理解しなければならず、対照的な思考が必要です。そして、融通の利く人間になってほしいですね。



国際化が進むなかでも何もかもすべて一律に、画一的になる傾向が強くなっています。これも私の持論ですが、将来豊かな文化生活を維持するためには、競争の原理だけではなく、ダイバーシティ(多様性)や個性が大事だと思います。

例えば、ヨーロッパの大学では、外国の学生を取り込むため、どこも使用言語を英語に切り替えてきています。ところが、みんな同じことをやってしまうと、10年先には個性の差がなくなり、競合上の利点もなくなってしまいます。むしろ他大学と違うところを生かして、学生が入りたくなるようにする道があると思うのです。日本の場合も固有の文化があるからこそ魅力的であり、よそで全く同じことが勉強できるとなると、日本に来る必要はないわけです。

上島 おっしゃる通りですね。オリジナリティーが大事です。知識基盤社会の中の大学では、オリジナルなものを生み出す教育と研究を進めなければ、誰も引きつけることはできません。常に、オリジナリティーを世界に発信し続けることが重要です。

最後に、関西大学をはじめ日本の大学生に、メッセージをお願いします。

Vande Walle 今、地球上の人口は約70億人で、資源は限られています。地球を大事にする姿勢、ものを大切にすることが

望まれます。我々の社会はものを使い捨ててきましたが、俳人の心境になって、小さなものも大事にしないとだめです。

それから、もっと積極的に外国へ出ていきましょう。外国へ出ていかなければ、自国の文化もよく理解できません。何かを理解しようとすれば、それと違うもの、異質なものも理解しなければならず、対照的な思考が必要です。そして、融通の利く人間になってほしいですね。

上島 Vande Walle先生のお話をヒントにして、学生たちには世界に羽ばたいてほしいと思います。本日はどうもありがとうございました。

Willy F. Vande Walle
(ウィリー・F・ヴァンドゥワラ)
1949年ベルギー生まれ。70年アントワープ州立大学東洋学部卒業。同大学院で日本学を研究し、72年来日。大阪外国語大学で日本語を習得した後、73～75年京都大学で日本文化と仏教史を専門的に研究。東洋学博士(ゲント州立大学)。77年に国際交流基金を得て京都大学で日本仏教史を研究。78年ルーヴェン・カトリック大学(現ルーヴェン大学)東洋学部日本語学専攻講師。78年10月から3年間、ヨーロッパ・ホンダ専属の日本語通訳者として活躍。81年にルーヴェン・カトリック大学東洋学部日本研究の主任、89年に同教授に就任。ヨーロッパにおける日本研究および東アジア研究の第一人者であり、2006年春の外国人叙職において旭日中綬章を受章。09年に関西大学より名誉博士号を贈呈。